第２回空襲・戦災・戦争遺跡を考える
九州・山口地区交流会報告集

と　き：2015 年 11 月 28 日 (土) 13:30-18:00
ところ：久留米市役所３階会議室

目　次

開会のあいさつ ---------- 工藤 洋三　1

調査・研究報告

1　大牟田市の行政資料でみる戦争・空襲 ---------- 鈴木 裕和　2
2　南九州の防空体制 ---------- 八巻　聡　8
3　1944 年 8 月 20 日墜落機とパラシュートについて ---------- 大神 順嗣　19
4　1945 年 3 月 18-19 日の九州に対する艦載機空襲 ---------- 工藤 洋三　21
5　玉名飛行場、特攻隊の軌跡 ---------- 高谷 和生　35
　～司偵振武隊と第九十・九一振武隊～

活動紹介

6　私設資料館「菊池飛行場ミュージアム」の運営状況と課題 ---------- 永田　昭　43
7　大牟田の空襲を記録する会の活動報告 ---------- 中嶋 光秋　45
8　「久留米空襲を語り継ぐ会」活動報告 ---------- 綾戸 麗子　46
9　「久留米空襲をたどる」フィールドワーク報告 ---------- 田所 寛和　48

閉会のあいさつ ---------- 鈴木 裕和　56

玉名飛行場、特攻隊の軌跡
～司偵振武隊と第九十・九一振武隊～

髙谷 和生 *

1. 緒言

本稿では熊本県北部に位置する玉名（大浜・高瀬）飛行場（註1）に関わる陸軍特攻隊の軌跡を、現地での証言、聞き取り調査、文献資料等により検証するものである。

これまで玉名飛行場（註2）では、1945年5月空襲以降の後半期に、それまでの教育隊機能から特攻隊中継基地として変貌したとされるが、実態が不明であり、45年5月の司偵振武隊と7月末の九十・九一振武隊の2事例でその機能を論考するものである。

2. 玉名（大浜・高瀬）飛行場の概要

(1) 陸軍玉名（大浜・高瀬）飛行場の造営

玉名市の大浜・横島・伊倉・豊水の水田地帯である北牟田集落中央部に飛行場建設が予定されたのは昭和17年春であった（註3）。陸軍航空本部熊本出張所長松澤定一陸軍主計少佐は、大浜町役場を訪れ大浜町北部の水田地帯が飛行場用地となったことを伝えた。開戦後、日本本土に新設する飛行場建設は陸軍航空本部が計画し、兵団経理部がその実施にあたっていた。建設の優先度は、まず重要都市・施設等における防空飛行場ではあるが、あわせて飛行兵教育の為の教育訓練用飛行場の建設も促進されていた。　昭和18年春、大浜小学校講堂に飛行場建設予定地の全地主300余名を集め、到着の印をもって、承諾書に替えて一方的に建設が伝えられた。計画では同年9月20日まで予定地内居住者に立ち退きを命令し、同日には地上物件移転補償料協定書調印が行われた。直ちに飛行場の建設が開始され、翌年三月には滑走路の一部を完成させるひっ迫した工事であった。建設に伴う土地等買収では、当時の標準価格の一.五倍程度であったが、土地の売主は受け取った売却代金を自由に出し入れができず、事実上は「問答無用の強制収用」（註4）であった。

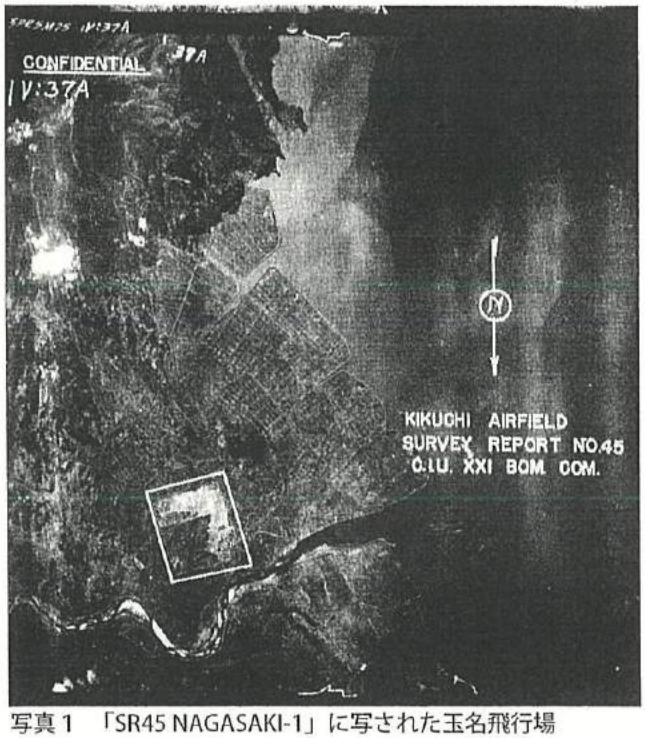

写真1　「SR45 NAGASAKI-1」に写された玉名飛行場（大浜・高瀬）飛行場の全景　工藤洋三氏提供

飛行場の建設にあたっては株木組による建物建設、西田組による朝鮮人労働者も徴用しての横平山暗渠掘削工事等、また多数の学生勤労動員による滑走路造成工事、周辺工事が行われた。昭和18年学徒動員令が閣議決定し、昭和19年から県下中等学校の通年動員が開始されると、玉名飛行場では8月から玉名実業学校農業科ほか数校の生徒達が大型排水路の掘削を、また9月からは玉名中学生徒も県道の両側拡幅による滑走路建設や山側への避難道路の建設に動員（註5）された。

このような突貫工事の結果、一辺1500m方形規格の教育隊面飛行場として、周囲に二本の水路を巡らした飛行場の全容が現れた。中核となる滑走路は「島式」と呼ばれ、80cmの盛土工法で豪雨時水没を避ける方法がとられた。小野尻・大園地区の中央部の南北方向に、排水を目的として三面張りの大型暗渠が掘削され、これを挟み北東・南西方向に幅100m、全長1000m規格で平行2本の滑走路建設が進められた。実際は敗戦時の完成状況は東側が800m、西側は600mの全長規模であったという。

(2) 陸軍大刀洗飛行学校玉名教育隊

玉名飛行場は、陸軍大刀洗飛行学校の教育隊施設として成立した。昭和19年5月14日の開隊記念日、地域の方々へのデモンストレーション飛行中に九八式直協偵察機から落下傘降下で人形を降ろそうとして、尾翼に落下傘が引っかかり機体が墜落する事故が起きたが、予定どおり二区隊編成での陸軍少年飛行兵の操縦訓練が始まった。教育隊では教官（将校）、助教（下士官）による操縦指導員30名で編成された。そのほか本部には、将

* くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

校や准尉、地元の事務員、整備班には菊池から移動したベテラン軍属や大刀洗で整備技術を取得した地元軍属の人々もいた。主計、軍医・衛生曹長・看護婦、炊事・兵器・被服部署に分かれ、正門の衛兵詰所には地元の方が軍属として立哨されるなど、多様な職域に地元玉名の人達が直接関わっていた。

開隊当初は滑走路工事の遅れから、離着陸距離が短くてすむ「四式基本練習機（ドイツ製ビュッカーユングマンを日本で生産した機体）」（註 6）や九五式三型練習機を使用したが、滑走路の拡張にともない、九五式中級練習機を、そしてより実戦機に近い二式高等練習機、九九式高等練習機を使用しての訓練へと移った。

三ヶ月に渡る訓練後、7月には少年飛行兵十五期生が卒業し、入れ替わるようにして8月1日陸軍特別幹部候補生操縦第一期生 120 名が入校し、新たな訓練が始まった。

その後は戦況の悪化にともなう大刀洗飛行学校の廃校を受け、教育隊は錬成部隊である空五四二部隊となり、昭和 20 年 5 月 10 日・13 日を迎える。この両日には九州全域で大規模な空襲があり、この爆撃により多くの飛行場が攻撃され全壊する。これにより錬成訓練は事実上困難となり、空五四二部隊は五月、空襲被害が無かった鳥取（米子）飛行場へ移駐となり、現地で特攻訓練を継続しつつ敗戦（註 7）をむかえる。移駐時に四式基本練習機の半数を米子へ空輸し、二機は山鹿秘匿飛行場（註 8）に牛車牽引での移送を行い、残りの機体は分解して木葉駅前の熊本繭繊維木葉工場の養蚕倉庫に隠匿され、他所への搬出を待った。

(3) 昭和 20 年 5 月の二度にわたる米軍空襲

これまで玉名飛行場の上空を悠々と通り過ぎていた連合軍機による爆撃機が、沖縄戦で被害が増大する九州・四国方面の特別攻撃を阻止するため昭和 20 年 5 月 10 日午前 7 時 50 分、マリアナの米軍基地から第二十一戦略爆撃機集団（註 9）42 機の B29 が発進し、内二機が初めて当地を空襲した。この B29 部隊の沖縄支援作戦は、3 月 27 日から始まり、最終の 5 月 11 日まで約百回に及ぶ攻撃が九州地区の各飛行場に向けられた。

この日の空襲で 250kg 爆弾 20 発が落とされ本部、車庫、無電室、物置五棟が全潰し、内 8 発は時限爆弾だった。民家への被害はなかったものの、司令部前庭にも爆弾が落下し、滑走路や建物も正確に爆撃され、軍人・軍属 5 名が亡くなられた。（註 10）

さらに 5 月 13 日午前 7 時 35 分、米軍航空母艦ランドルフとパターンの二艦からの艦載機 59 機による二度目の攻撃が行われた。グラマン F6F 戦闘爆撃機やカーチス SB2C 爆撃機・ヘルダイバー SB-1 戦術爆撃機によるもので、142 発の小型爆弾と機銃掃射により、大小の格納庫と飛行場の建物は完全に破壊されその機能を失った。この 2 回目の空襲では不幸な事に、飛行場と隣り合わせの瀬戸町・天神町・下町の民家や大浜村役場に爆弾等が落とされ、民間人 12 名が亡くなられ十数戸が焼失した。この日は、玉名だけでなく菊池飛行場や黒石原飛行場ほかも同時に空襲され、県内の飛行場は重大な損害を被った。

(4) 玉名飛行場後半期の概要

空五四二部隊の米子移駐後は、玉名をはじめ熊本・隈庄・菊池・黒石原・山鹿・植木・熊本北・大津の県内九箇所の飛行場に実戦（特攻機を含む）部隊の配置がなされた。部隊は第五一・五二・五九飛行部隊、第二四四飛行戦闘隊、第六二重爆飛行戦闘隊で、これらの部隊には一式戦、四式戦、偵察機、襲撃機等が配置されていた。この第三十戦闘集団には練習機特攻機が多数が配備（註 11）されていた。

玉名飛行場では 5 月の空襲により、飛行場北西側の教育隊兵舎、格納庫等は被害のため、利用することができなくなった。そこで、飛行場東側の野部田・天水地区に上空から目立たないように、飛行機を格納する無蓋掩体壕を十数基造成し、来玉した航空機の隠匿に努めながら、飛行場機能を東側に移し維持してきた。

搭乗員は野部田の法光寺等（註 12）に宿泊し、整備員は周辺の住宅に、飛行場警備の要員は天水・大園の急造した各二棟の三角兵舎に分散した。また、滑走路も現在の県道玉名小天線の直線部分を臨時的に利用していた。

3 司偵振武隊「振武桜特別攻撃隊」

(1) 特攻隊の証言

地元紙、熊本日日新聞社 2013 年 9 月 19 日の特集「戦争と私」の項に、証言「りりしい将校　遺影との再会」が掲載された。玉名市繁根木の髙木良幸さん（掲載時 80 歳）が、旧玉名中学生として学徒徴用で作業にあたった大浜飛行場で出会った「陸軍司偵振武隊」の記憶証言（註 13）であった。

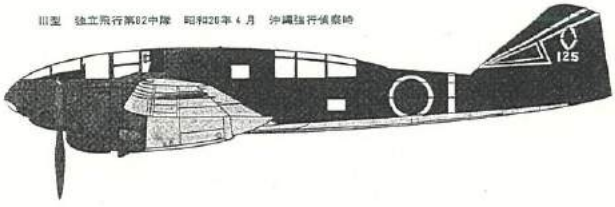

図 1　100 式司令部偵察機Ⅲ型　側面図・カラーリング
『100 式司令部偵察機』世界の傑作機 38　文林堂

以下に概要を記す。「5月末頃、‥‥新司偵が1機降りてきて、白鉢巻きで長刀、短銃をささげた乗員が降りてこられました。“今日はここ大浜でゆっくり休み、明日、鹿屋に行きます”と言われた将校の方の命を懸けたりりしい姿が今も忘れられません」と記されていた。

(2) 司偵振武隊（振武桜特別攻撃隊）

陸軍記録では、この部隊は昭和20年3月10日、第6航空軍で編成され、第30戦闘集団所属、操縦者14名からなる特別攻撃隊（註14）である。装備機は「百式司令部偵察機Ⅱ・Ⅲ型」で、陸軍では本機種特攻隊が敗戦までに全7隊編成されたが、唯一実戦に投入された部隊である。隊長は陸士第56期の竹中 隆雄中尉（写真3）であった。

4・5・6月と各2隊ずつ計6隊が編成され、本部隊のほかは、本土決戦に備え温存され、群馬県館林飛行場で訓練が継続され、そのまま敗戦を迎えた。振武特攻隊用の百式司偵機は、すべて他隊からの中古機が割り当てられた。

本部隊は陸軍記録上は「振武桜特別攻撃隊」（註15）とも記されており、部隊機尾翼に描かれた「ドクロマーク」（写真2）が著名な部隊でもある。頭骨に十字で大腿骨をクロスさせ、下段機番はチョークで下書きしたのち、白ペンキによって描かれていた。ドクロ下段のト-47のカタカナの「ト」は特攻隊を示している。同特攻隊には10機が割り当てられたが、特攻に使用したのは8機であり、このドクロマークも全ての機体に描かれたものではなかったとされる（註16）。表1に部隊編成表を記す。

(3) 玉名飛行場来訪機体の確定

各種陸軍資料及び部隊回想録による「司偵振武隊（振武桜特別攻撃隊）」の動きを概観する。表2内の□印は『陸軍特別攻撃隊戦没者戦没者名簿』『特別攻撃隊の記録〈陸軍編〉』等による。△印は本部隊員である『植木 肇曹長の回想録』による。本回想録を戦後に書かれている植木曹長は敗戦時に存命し、森川不二雄軍曹とペア機となる。

写真2　司偵振武隊機体尾翼に描かれたドクロマークと特攻機の機番
『特別攻撃隊の記録〈陸軍編〉』光人社　2005

写真3　部隊長竹中 隆雄中尉　昭和20年4月7日特攻死
22歳、神奈川県出身。海上自衛隊鹿屋航空基地史料館提供

司偵振武隊員14名の内、9名が戦死、内特攻死は8名である。残り5名の隊員は、蓆田飛行場において待機中に敗戦となる。

今回の高木良幸さん証言では、当初司偵機の来玉を5月末とされていたが、高谷の聞き取り調査で「新学期が始まって間もない暑い日であった」（註17）と証言内容を一部修正された。さらに、陸軍部隊で司偵機利用は本部隊のみであることから、本部隊に絞り、来玉機を特定する。

表1　司偵振武隊（振武桜特別攻撃隊）部隊編成表

	氏　名・階級	戦　死 月　日	没 年齢	出身	出撃地	新司偵 型式	出身地
1	竹中 隆雄　中尉	4月　7日	22	陸士56期	鹿屋	Ⅲ型	神奈川県
2	東田 一男　少尉	4月12日	21	陸士57期	鹿屋	不明	滋賀県
3	古山　弘　少尉	5月14日	23	幹候8期	蓆田	Ⅱ型	島根県
4	井手 敏秋　少尉	存命	-	幹候8期	-	-	-
5	山路 實　少尉	5月14日	25	特操1期	蓆田	不明	三重県
6	植木 肇　曹長	存命	-	少飛7期	-	-	-
7	吉原 重発 軍曹	4月　7日	22	少飛9期	鹿屋	Ⅲ型	北海道
8	中澤 忠彦 軍曹	4月12日	21	少飛11期	鹿屋	不明	滋賀県
9	森川 不二雄軍曹 ※偵察時に墜落、	5月23日 特攻認定なし	不明	少飛11期		不明	
10	熱田 稔夫 軍曹	5月14日	20	少飛12期	蓆田	不明	岡山県
11	川上 久雄 伍長	存命	-	少飛13期	-	-	-
12	佐藤 武男 伍長	存命	-	少飛13期	-	-	-
13	慶増 和一 伍長	5月14日	20	少飛13期	蓆田	不明	千葉県
14	平林 森義 伍長	存命	-	少飛13期	-	-	-

この項は、知覧特攻平和会館八巻悟氏提供資料を、高谷が加筆・訂正による。

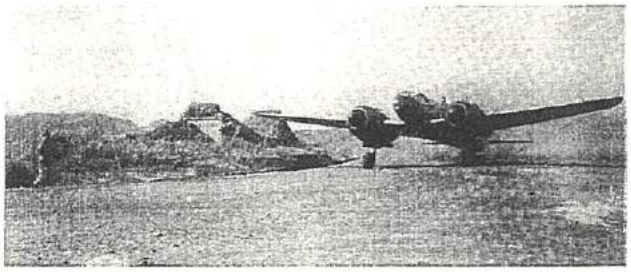

写真4　昭和20年5月、鹿屋飛行場から沖縄方面に向け出撃する「独立飛行第19中隊」大橋政夫中尉搭乗のIII型甲。
山口県小月基地に駐留していた独飛19中隊は、沖縄戦が間近に迫った昭和20年3月、6航軍に編入された。
『100式司令部偵察機』世界の傑作機38　文林堂

表2に示した様に、『特別攻撃隊の記録〈陸軍編〉』等によると、4月3日段階で鹿屋には「3機の可動機」があり、5日に蓆田にて出陣式を行った後、「竹中隊長、東田少尉、吉原軍曹、中澤軍曹」の四機が大分を経由して鹿屋に移動する」とある。さらに6日朝には「鹿屋に7機（駐機）」と記録される。一方7日の「植木肇曹長の回想録」では「竹中中尉、東田少尉、吉原・中澤・熱田軍曹の5名が鹿屋へ来た」とされ、前日までに駐機していなかった「熱田稔夫（あつたとしお）軍曹」機が突然現れる。この事から整備の遅れ等の何等かの理由で、先発4機に遅れた熱田機が、馴染みのある航路を単機で飛行し、玉名飛行場に駐機（註18）したものと想定した。

証言をいただいた高木良幸さんに、ご遺影（写真5）をお見せしたところ、写真からの人物確定は困難だったが、尾翼ドクロマークは「玉名への来訪機には描かれていなかった」と証言されている。

ここで教育隊飛行場として主任務のほか、特攻機に関しても陸海軍機の駐機を行う補助的運用（註19）がなされていた玉名飛行場の実態が浮かび上がってくる。

表2　司偵振武隊（振武桜特別攻撃隊）の動き

昭和20年 3月22日	□独立飛行第17中隊（調布飛行場）を編成担当として、隊長竹中隆雄中尉以下14名で編成。 □百式司偵II型4機、III型6機の計10機で構成され、全員が操縦員であった。
3月26日	□調布をたち、蓆田に移動。
	命により7機14名、調布から蓆田へ移動。
3月29日	△竹中少尉、東田少尉、吉原軍曹、中澤軍曹の4名4機、大分基地へ前進する。
3月30日 午後	△前記4名、濃霧のため出撃できず「出撃中止」。蓆田へ帰る。
4月　3日	□鹿屋に可動機3機（で進駐）。（他の）人員3名は在福岡。
4月　5日	□蓆田にて出陣式。その後竹中隊長、東田少尉、吉原軍曹、中澤軍曹の四機が大分を経由して鹿屋に移動。
4月　6日 朝	□鹿屋に7機（駐機）。
4月　6日	□鹿屋から竹中中尉、東田少尉、吉原軍曹、中澤軍曹の四機が出撃し、嘉手納沖にて　突入、特攻死。 （註1）陸軍特別攻撃隊戦没者名簿では竹中・吉原の第1編隊は、4月7日戦死と記載。 （註2）東田・中澤の第2編隊は、天候影響で会敵せず、鹿屋帰還。12日戦死。
4月　7日	□司偵振武隊1機出撃。
	△竹中中尉、東田少尉、吉原・中澤・熱田軍曹の5名が鹿屋へ来た。 2機爆装し準備。 △80番を胴体に吊るした。（百式司偵3型）竹中中尉と吉原軍曹。 △海軍から彗星艦爆1機「大沼中尉・宮田上飛曹」が誘導機として出た。 （註3）海軍三航艦の戦闘第812飛行隊「大沼宗五郎中尉、宮田治夫上飛曹」 △14:40出撃。 数時間後、彗星から「突入命中」の旨、報告が入った。 彗星も「我モマタ空母ニ突入ス」と打電し、未帰還。 （註4）本海軍機彗星は、昭和20年4月7日奄美大島東方海面の敵艦に向けて誘導後の突入。 「連合艦隊告示（布）第173号」では、特攻としては扱っていない。
4月12日	□2機出撃。
	△東田少尉、中澤軍曹が出撃、突入。
5月14日	□蓆田から熱田軍曹出撃し（沖縄東方洋上空母を目標）突入、戦死。 □陸軍特別攻撃隊戦没者名簿では古山少尉・山路少尉のペアが、この日突入戦死。 □この日は福岡から司偵が2機出撃したという。 （註5）4機蓆田（鹿屋）を出撃し1機墜落、2機突入。
	∠古山少尉、熱田軍曹、山路少尉、慶増伍長突入。
5月23日	∠森川軍曹、沖縄偵察時敵機に撃墜され戦死。 ∠以上9名戦死。内特攻死は8名。 残り5名の司偵振武隊員は、蓆田において待機中に敗戦。

□印は『陸軍特別攻撃隊戦没者戦没者名簿』『特別攻撃隊の記録〈陸軍編〉』等による。
∠印は「植木肇曹長の回想録」による。
※この項は、知覧特攻平和会館八巻悟氏提供資料を、高谷が加筆・訂正による。

その後5月14日第7次航空総攻撃で第1編隊古山少尉・熱田軍曹、第2編隊山路少尉、慶増伍長に分かれ、沖縄沖の米軍艦艇に突入し特攻戦死（註20）された。木製アンテナが短く切られた長機である古山少尉機の出撃時写真（写真6）が唯一葉残されている。

4　第90（修武隊）91（殉皇隊）振武隊

（1）編制と展開

玉名飛行場に最後に部隊として駐留したのは第九十振武隊（修武隊）、第九一振武隊（殉皇隊）の24名（註21）だった。この部隊は昭和20年3月に韓半島北部の連浦基地第20教育飛行隊で修業を終え、3月19日特攻隊の拝命を受けた。宇都宮での機体受領後に京都飛行場に移駐し、1ヶ月程大阪湾での艦船に対しての特攻攻撃の習熟を行い、菊池飛行場での一週間の逗留を経た後、敗戦まで玉名に逗留した九三式中等練習機による特攻隊である。

部隊員証言（註22）では、機体塗彩は黒色、出撃時には胴体に五十kg爆弾を懸架させ、米軍上陸小型艦艇を迎え撃つ予定であった。

宇都宮基地での第九十振武隊「修武隊記念写真」（写真7）での部隊員名は以下の通りである。中央左側が校長徳川閣下、右側が幹事石川閣下。上段左から山門明伍長、四宮至伍長、品田喜一少尉、池部範雄伍長、塚本要伍長、野村剛一伍長、平間正男伍長。下段左から龍野一朗伍長、峯岸正夫伍長、今泉安治伍長、伊藤政雄伍長、河野貢伍長である。通称は品川隊である。

なお、同一行動をとっていた第九一振武隊は浅田五十義少尉が隊長、通称は浅田隊で、集合写真等は残されていない。以下階級未詳であるが、川中清登、中川卓哉、田部井栄一、新井克彦、小川治郎、根岸昭治、村上幸雄、北川春夫、池田正義、高谷義弘、成田某の全12名（註23）である。

（2）移駐時の墜落事故と敗戦、戦後の法光寺会

昭和20年7月29日移駐してきた本振武隊の一機が、滑走路を誤認し着陸に失敗、民家に墜落、居住していた幼児（木下和臣ちゃん）が亡くなられる悲惨な事故が起こした。搭乗員は乗機から離脱・存命し、直ちに軍務に服したが、家族への補償等については関係者が鬼籍に入り不明である。

その後、部隊は二週間当地で薄暮の習熟訓練を行い、14日に移動命令が出され待機中に敗戦となり、両部隊は出撃する事なく現地で解散、全員が郷里に復員した。残された特攻用練習機はその後進駐軍の命令により、飛行場の北側に集められ、円陣を組み瞬く間に焼却された。

県内各飛行場の敗戦時の状況等は多くは不明で、玉名飛行場の様に残された部隊誌や写真から全体像が解明する事は稀である。これらの資料により本土決戦に向け、上陸時に「一撃をあたえる」為に、中練機部隊の実像が明瞭に理解できる。

戦後、木下家では復員した父親の意思で、墜落機事故で亡くなった一臣ちゃんの名前を大浜町建立の戦没者慰霊碑に刻むと共に、消失母屋の柱（写真10）を今も大切に保管されている。

また両部隊員により宿泊先であった法光寺との交流は継続され、1990年5月19日平和の大切さをつたえる特攻慰霊碑（写真11）が法光寺境内に建立された。そして2007年7月28日に、元部隊員である池部範雄さんにより初めて焼香と慰霊（註24）がなされた。

（3）熊本県内での陸軍中練特攻機

第九十振武隊員四宮至氏のアルバムには、玉名飛行場での部隊機の写真は残されていない。これまでに県内で

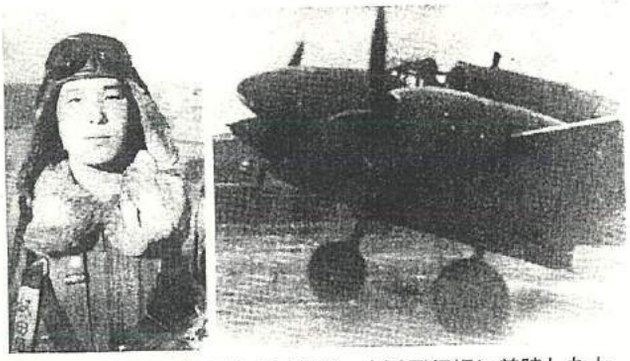

写真5　昭和20年4月6日夕刻　大浜飛行場に着陸したと想定できる「熱田稔夫軍曹」の遺影

写真6　同年5月14日第7次航空総攻撃で、福岡県蓆田（現板付）飛行場から、熱田軍曹と一緒に特攻出撃した古山少尉機。Ⅱ型胴体に500kg爆弾が懸架され、アンテナ支柱は短く切り詰められている。

ともに『特別攻撃隊の記録　陸軍編』光人社

写真7　宇都宮基地での第九十振武隊「修武隊記念写真」四宮至氏蔵

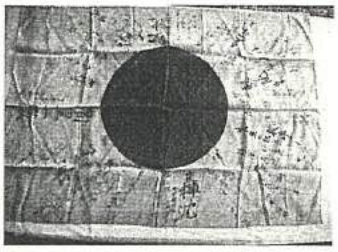

写真 8　駐屯先の玉名市野部田法光寺山門前での第九〇振武隊員と慰問の地元住民　四宮至氏蔵

写真 9　法光寺に残された両部隊の寄せ書き日章旗　法光寺蔵

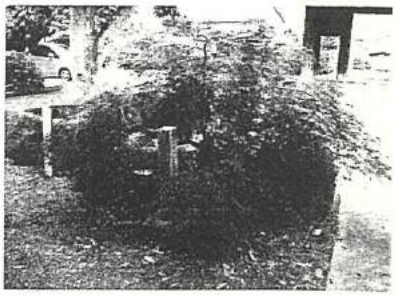

写真 10　木下家で保管されている昭和 20 年 7 月 29 日墜落事故で消失した母屋柱

写真 11　法光寺境内の慰霊碑

は、戦後進駐軍により撮影された中練特攻機写真（1945 年 10 月 26 日撮影）2 葉が、熊本日日新聞社総合メディア局データベース部（註 25）に残されている。1 枚（撮影番号 147553）は中練特攻機と九九式軽爆撃機、百式輸送機等が飛行場の一角に集められカット。もう 1 枚(撮影番号 147559）は、その中の陸軍中等練習機（九五式Ｉ型）特攻仕様機を拡大したもので、垂直尾翼には桜の花びらにひらがなで「と」と特攻機である事を示し、胴体後半部には振武隊番号「86」、機番号「08」、さらには部隊の通称名と思われる「薫風」の文字が描かれている。写真裏に貼り付けられた英文タイプでは「Special Attached」「Kikuchi　Airfield」「23,Oct,45」等と記載されている。

また、熊日新聞社保管写真と同様写真（写真 12）を米国公文書館所において、工藤洋三氏が発見され、高谷が提供を受けた。米国公文書館での保管は、ルーズリーフ形式で台紙でファイリングされ、撮影写真を添付し、熊日保管写真裏面の同文の説明文が記載（註 26）されていた。

この有名な特攻中練機写真は、幾つかの書籍で紹介され『SAMURAI　破壊された日本軍機』（註 27）では菊池飛行場とされ、『日本軍用機写真総集』（註 28）では「健軍飛行場」と標記されている。

さらに黒石原飛行場に敗戦時に駐留していた中練機特攻隊員「第 94 振武隊」の末崎興助さん（新潟県柏崎市在住）の証言で「自分たちの隊は、兄弟隊の第 95 振武隊と一緒に、八景水谷の八景閣に逗留し、黒石原飛行場に通っていた。近くには、健軍飛行場に配備された第 96・97 振武隊員もいた」と証言（註 29）されている。両飛行場に関わる資料の洗い出し等を含めて総合的に本写真の撮影場所の特定が急務である。

5　結　語

本稿では玉名飛行場を中心に、1945 年の敗戦間際に逗留した特攻二部隊の概要をまとめてきた。今後、玉名飛行場の資料を追加しながら、熊本県内各飛行場の特攻中継基地としての機能をより明瞭に描いていきたい。その事が戦争末期、日本で行われた特攻作戦を史実として

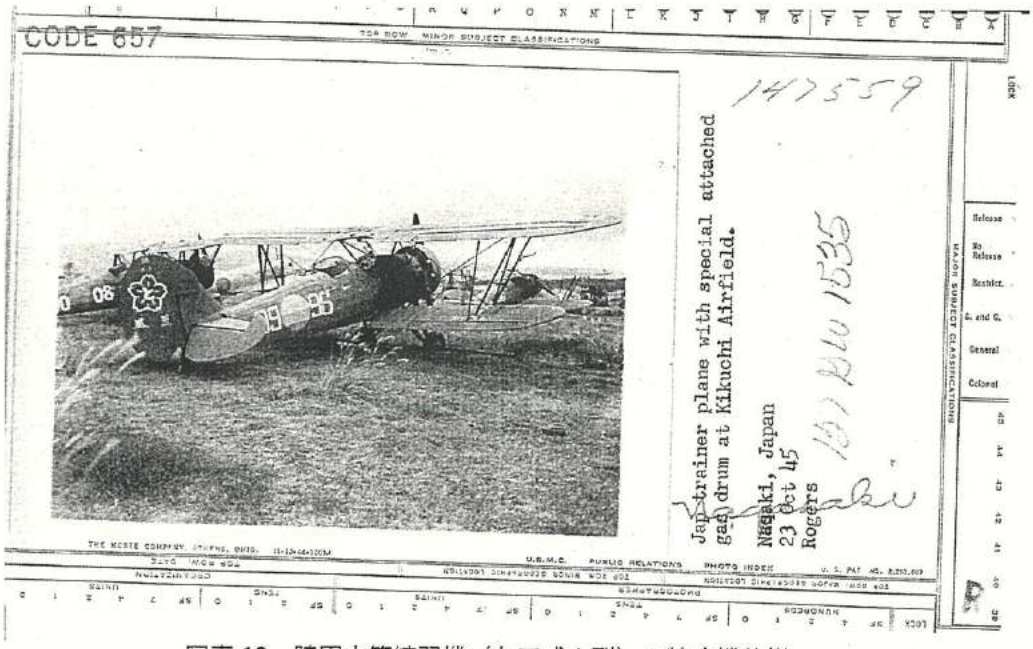

写真 12　陸軍中等練習機（九五式Ｉ型）の特攻機仕様
米国国立公文書館所蔵、工藤洋三氏提供

知る手がかりとなると考える。

その為にも知覧特攻平和会館等に残されている特攻隊の部隊記録の調査、出撃しなかった待機特攻隊員の証言等を探していきたい。

最後に資料提供や証言をいただいた八巻聡氏、工藤洋三氏、高木繁男氏、鈴木義宏氏、末崎興助氏、木下彰氏、荒川恒光氏、法光寺、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館にお礼を申し上げます。

［ 註 釈 ］

註1　当飛行場について、田邊哲夫氏は昭和55年「玉名の自然と文化を守る会」会報上に、初めて地元大浜町の古老からの聞き取りとして本飛行場を紹介され「高瀬飛行場」と呼ばれた。当飛行場で操縦准尉として勤務され戦後は伊倉に居住された鈴木清氏は、『歴史玉名』での大浜飛行場回想で当飛行場の詳細な概要を報告され「大浜飛行場」と呼称され、その後は『歴史玉名』誌上では大浜飛行場の呼称が多く使用された。さらに飛行場呼称については、高木氏は「大刀洗陸軍飛行学校玉名教育隊」「第三十戦闘集団の配置飛行場名」から「玉名飛行場」、『玉名市史』では「大刀洗陸軍飛行学校第三教育隊玉名教育隊」から「玉名飛行場」、内山幹生氏は旧横島町役場文書「陸軍高瀬飛行場土地買収一件綴」の資料論考により「高瀬飛行場」、玉名歴史博物館図録等では「大浜飛行場」「玉名飛行場」の両者の呼称とされてきた。これらのことから、筆者は平和教育等の地元説明では馴染みのある「大浜飛行場」と呼び、史料として報告する際には戦史叢書・熊本県警察史・米軍公募記録で記載された「玉名飛行場」と呼称している。なお、基本文献として次の各書・各論文があげられる。

○田邊哲夫「陸軍高瀬飛行場聞書（1）」『玉名の自然と文化を守る会　第4号』1980

○高木繁司「玉名における大東亜戦争－末期の兵力配備、飛行場－」『歴史玉名　第9号』玉名歴史研究会　1992

○鈴木清「大浜飛行場回想」『歴史玉名　第15号』1993

○『昭和20年の玉名展　終戦から50年』玉名歴史博物館こころピア 2005

○「玉名飛行場と高瀬鉄橋」『玉名市史　上巻』玉名市史編纂委員会　2006

○高谷和生「玉名（大浜）飛行場」『子どもと歩く戦争遺跡Ⅱ　熊本県北編』熊本の戦争遺跡研究会　2006

○高谷和生「玉名飛行場」『熊本の戦争遺跡』創想舎　熊本の戦争遺跡研究会　2010

○内山幹生「陸軍高瀬飛行場用地買収等に関する諸問題と戦後処理」『歴史玉名　第57号』玉名歴史研究会 2004

註2　玉名飛行場全景を米軍撮影「SR45　NAGASAKI-1」写真により示す。標記では、当日作戦用務の撮影ルート状況から後半に撮影した菊池飛行場の1枚を確認し、「KIKUCHI」と書かれている。その後の海軍空襲資料では、オリジナル写真に手書きで「TAMANA」と修正している。詳細は高谷和生「陸軍玉名飛行場撮影の米軍空撮写真資料」『歴史玉名　第65号』2010　玉名歴史研究会

註3　この項「飛行場概要」については、玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワークの各例会資料に詳述している。高谷和生 「大浜飛行場を歩こう～玉名の戦争遺跡をつたえよう～第1回　例会資料」2005。高谷和生「高瀬と大浜飛行場第4回例会資料」2006。高谷和生「大浜飛行場を歩こう～熊本の隠された特攻基地を探る～第7回例会資料」2007。高谷和生・戸崎孝行「大浜飛行場を歩こう～玉名飛行場と大浜の空襲をめぐって～第10回例会資料」2008。高谷和生「大浜飛行場を歩こう～次世代への平和の継承～第13回例会資料」2009。高谷和生・熊本県建築士会あらたま支部「大浜飛行場を歩こう～大浜飛行場格納庫をワークする～第14回例会資料」2010。高谷和生・熊本県建築士会あらたま支部「大浜飛行場を歩こう～大浜飛行場を復元する～第15回例会資料」2011。

註4　玉名飛行場の開設・緒言期をテーマとした講演会で、内山氏は用地買収状況を詳述され、高瀬飛行場買収の問題点として「実質的には売買契約に基づく債務履行ではなく、問答無用の強制収用であった」と記し、戦時下に造営された軍用飛行場に共通する買収状況に言及された。内山幹生「陸軍高瀬飛行場における土地収用と戦後処理」玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク第21回例会講演資料 2012

註5　当時の勤労動員については『歴史玉名　第15号』1993の三編に詳しい。上田虎喜「大浜飛行場へ動員」、竹下繁「大浜の軍事飛行場建設作業に参加して」、坂田一成「大浜飛行場建設と空襲」

註6　四式基本練習機キー86は、ドイツ製ビュッカーユングマン複座機を日本国際航空でライセンス生産した機体で、エンジンはハー11「初風」（百十馬力）を装備した。昭和18年7月初号機以降、一千機以上が生産され初等訓練に利用された。多賀一史『日本陸海軍航空機ハンドブック』PHP文庫　2002

註7　米子での錬成訓練から敗戦までの様子については次の二編に詳しい。佐藤晄『赤トンボの兵隊ごっこ～特幹飛行兵のの回想』社陵高速印刷株式会社出版部 1982。北岡文夫「わが青春の記録」『翔飛 大空を翔けた青春 大刀洗陸軍飛行学校第一　期特別幹部候補生記録集』1985。

註8　山鹿（赤穂原）秘匿飛行場に関して、石山仁明氏ほかの和水町内での聞き取り調査による。

註9　「四月中、下旬B29の九州来襲、飛行場攻撃」防衛庁防衛研修所戦史室『本土防空作戦』戦史叢書第19号 1968。熊本県警察本部 『熊本県警察史』1961。「玉名飛行場と高瀬鉄橋」『玉名市史 上巻』玉名市史編纂委員会 2006

註10　大浜地区の空襲状況については次の三編に詳しい。中山　博之「米軍の記録に見える大浜の空襲」『歴史玉名第23号』1997。森田深淵「戦争と私の人生体験」同書。熊本県警察本部『熊本県警察史』1961

註11　「第六航空軍決号作戦計画の大綱」防衛庁防衛研修所

戦史室『本土決戦準備〈2〉九州の防衛』戦史叢書第57号 1972

註12　敗戦後各地に復員した第九十振武隊（修武隊）、第九一振武隊（殉皇隊）の24名は、戦後40有余年を経過した1984年7月から逗留した法光寺に参集し「法光寺会」を定期的に催した。

註13　高木良幸さんの証言「りりしい将校　遺影との再会」は、2014年1月22日・23日に熊本日日新聞社「伝えたい私の戦争」に詳細に記載された。またこれらを基に、2014年2月9日玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク第25回例会を催し、「陸軍司偵振武隊の軌跡」として内容をとりまとめた。

註14　「司偵振武隊（振武桜特別攻撃隊）」『特別攻撃隊の記録〈陸軍編〉』光人社　2005

註15　「第14話　桜隊散る」『陸軍特別攻撃隊史』
『100式司令部偵察機』世界の傑作機38　文林堂　1993

註16　前掲書14より

註17　平成25年12月12日松本重美・戸崎孝行、21日高谷の聞き取り調査による。

註18　目視で地形を見ながら飛行する陸軍機の場合、「目的地までの航路選択は搭乗員にある程度まかせられていた」（東京陸軍航空学校第6期生・目達原教育隊教官の宮尾立身氏）と証言された。単機で初めて鹿屋まで飛行する熱田機は、馴染みのある大刀洗飛行学校を経た航路を選択しその途中にあった玉名飛行場に着陸した事が想定される。

註19　これまでの玉名飛行場に関わる聞き取りで陸軍四式戦闘機疾風、海軍局地戦闘機雷電、百式輸送機等が着陸している。

註20　本部隊の特攻については、読売報知新聞の昭和20年4月11日記事「陸海軍一体の特攻隊　精鋭新司偵に爆装　直援の彗星も空母に突入」の記事が、4月7日竹中機・吉原機の特攻を紹介している。また、WEB版「日本陸軍航空史（その30）~航空特攻5~」に、5月14日の古山機・熱田機・山路機・慶増機が突入したのは、米海軍記録で空母「バンカーヒル」だったと言われている。

註21　法光寺会会報『九十振武隊・第九十一振武隊　半世紀のあゆみ』平成17年11月25日刊行。

註22　第九十振武隊員四宮至氏への聞き取り、所蔵アルバム調査、池部範雄氏からの複数回の聞き取りによる。

註23　前掲書註21ほか、法光寺会誌2006年10月作製

註24　2007年7月28日第九十振武隊員池部範雄氏による木下家訪問で、初めて部隊員による焼香と慰霊がなされた。

註25　熊本日日新聞社総合メディア局データベース部保管資料では、菊池飛行場は10枚、健軍飛行場は9枚である。また、連番となる撮影番号（当初のネガ番号ではない）は、撮影年月日からして後日にまとめて記載されたものと考えられ、健軍・菊池飛行場の撮影写真が混在した状態が見てとれる。

註26　工藤洋三氏は米国国立公文書館で菊池飛行場4枚、健軍飛行場3枚を入手されている。写真が貼り付けてあるカードに「RG 127 Records of the U.S. Marine Corps」と記載されている。戦後に熊本市北区清水町「キャンプウッド」（旧陸軍熊本幼年学校跡地）に進駐した海兵隊により、菊池、健軍の飛行場の飛行機・武器類が接収され本写真は撮影されたものと判断できる。

註27　カット註釈では「菊池飛行場」とし、尾翼マークを「第21戦隊」、後部席ドラム缶を「揮発性液体を入れた」と書かれている。ロバート・C・ミケシュ『SAMURAI　破壊された日本軍機』三樹書房　2004

註28　同様のカット註釈では「熊本県の健軍飛行場」、「沖縄までの航続距離を確保するために、後部にドラム缶を積み込んでいる」と書かれている。『日本軍用機写真総集』光人社　1995

註29　第94振振武隊の末崎興助氏は少飛15期出身で、韓半島の蔚山で特攻隊を拝命。昭和20年3月大邱飛行場で部隊編成。立川飛行場で乗機を拝受し、桶川、浜松、広島、戸田小浜、小月、黒石原と移駐、そこで敗戦を迎える。特攻機は九五式中練機で、機体は草色の濃い色（ダークグリーン）に塗られ、機首カウリングには平仮名で「か」等の一文字を、尾翼垂直尾翼には部隊マークとして、赤色で雷マークの矢印が描かれていた。

［　参考文献　］

○髙谷和生他『熊本の戦争遺跡』創想舎　熊本の戦争遺跡研究会　2010